



地域づくりコーディネーター
水野 雅 男

研究課題は街に転がっている

「街へ出て課題を見つけてきなさい」

これが、私の大学時代の研究室の教授の口癖でした。卒論や修論のテーマは与えられません。課題を自分で探してきて仮説をたて、それを検証する方法論を組み立てていくものでした。20数年前街並み保存が話題となっており、金沢出身だったこともあり、このジャンルで研究をしたいと漠然と考え、研究室で文献やら研究やらを眺めていましたが、一向に切り口となるテーマ見つかりません。それもそのはず、社会で何が問題になっているのか実感していなかったのですから。そうしているとき、研究室の先輩から紹介していただいた地域調査のアルバイトがきっかけで、調査研究の対象フィールドとテーマが見つかりました。それは、高知県の手結（てい）港、江戸時代に我が国で初めて掘込まれた港、その保全を検討するための住民のイメージ認識を調査研究しました。何度か通いながら、聞き込みをしたり、調査票を配布回収したりしました。夜、確か調査を終えて宿に帰るとき、「ちょっと飲んでいけ」と民家の酒盛りの場に誘われ、杯を酌み交わしながら港の話やそこで営まれる生活のことを聞かせてもらいました。宿の国民宿舎は港を見下ろす高台にあり、そこまでは狭く曲がりくねった真っ暗な山道を登らねばならないので、あまり深酒はしないようにと気を付けながら。この時、地域づくりはその住民と話すことから、一緒にお酒を飲むことから始まるのだと体で感じました。

コンサルタントからコーディネーターへ

そのアルバイトの経験から、大学を卒業した後、

地域計画に携わるコンサルタント会社へ就職。2つの会社を経て独立。コンサルタントを10年あまり経験した頃から、計画づくりに終始していることに空しさを感じ始めました。計画した地域づくりを実際に実現したい、その欲求が高まってきた頃、ちょうど金沢大野の地域づくりを地域住民と一緒に考えていました。みんなで自分たちの街を歩き回り、身の丈に合う目標（先進事例）が見つかった時、地域づくりのエネルギーが頂点に達し、遊休化していた蔵の改修作業を始めました。行政の支援は何も得られなかったので、自分たちでお金を持ち寄り、土木作業に汗を流しての「住民主体の地域づくり」。のちの「くらくらアートプロジェクト」の第一歩です。この時、地域づくりの事業を推進するためにコーディネーターとして携わることの楽しさと面白さを知りました。

設計の現場を持つ

「くらくらアートプロジェクト」では、蔵の改修にあたって、空間の利用計画づくり、大掃除から大工仕事、運営企画まで多岐に亘ります。それを地域住民と地域外から支援するサポーターが協力して行ってきました。当初は大学生も社会人も同じ立場で作業員として関わってもらいましたが、最近の2つの改修事例においては、大学生の専門性を活かそうと建築学科の大学生に設計のチャン



デザインゼミ

スを与えることにしました。アーティストのアトリエとコミュニティサロンとして再生するプロジェクト。入居するアーティストや利用する地域住民の声を聞きながら、空間をデザインし、工務店と打ち合わせをし、新しい空間を創りあげました。実測、基本・実施設計、設計監理、実際の「現場を持つ」機会は、大学内ではまずありません。彼らにとって、とても貴重な体験でした。

大学生を街に引き込む

それと前後して、「安全安心まちづくり（あんあん）」の活動も展開していました。そこでも、大学生のパワーを活かそうと、彼らが参加する機会を提供しました。まちづくりで何が問題になっているのか、どういうことを手伝えるのか、まず街を知るために数回に渡って街を歩き、こどもの遊び場を見つめ直そうということに。お茶を飲みながら、おやつを食べながら地域の方々と歓談することが必要だから、街角にカフェを出そうということで移動式のカフェを彼らは作りました。美



移動式カフェ

大号と工大号、それぞれのチームがデザインし制作、金大生はカフェの運営を企画準備しました。子供たちと一緒に餅を焼いたり、焼き芋したり、遊んだり、そんな中で会話が弾み、地域におけるこどもの遊び場が抱えている問題点を把握し、対

策を考えました。

大学生が「街ゼミ」を運営

「あんあん」の活動は、やがて「街ゼミ」に引き継がれました。もっと地域づくりに貢献してもらおう、社会でまちづくり活動する楽しみを後輩にも味わわせてあげたい、そういう欲求が結実しました。最初は、学生が活躍する場を紹介し仲介してあげましたが、今年度からは学生が主体的に活動を始めました。市内のアートイベントと連携し、まちなかの会場をレンタサイクルで回遊してもらう「チャリdeアート」を企画しました。放置自転車を収集し、手入れや改造、ペインティングなどを行い、アートなチャリを25台用意しました。まちなかの走行環境を点検し、チャリマップをデザイン印刷。10日間のレンタルターミナルの当番も交替で担当しました。利用者の感謝の気持ちを直に聞くことができたこと、まちなかの交通手段の大切さを実感したことなど、収穫の多いプロジェクトでした。なんとといっても、大学生が自主的に行動を起こしたことは素晴らしいことです。

大学を飛び出して街と関わる

このように、少しずつ大学生が街や地域社会の活動に関わり始めました。地域づくりにおいて、自分たちのエネルギーや専門性が求められている



街の探検

という手応えも感じ、そういう仕事に就く人も少なくありません。でも、そういう大学生はまだ少数です。大学のキャンパスの中で、与えられた課題に取り組む、講義や教科書しか知らない、そういう学生がほとんどです。どの学部で学んでいるにしろ、あるいはどういう職業に就くのであれ、

社会との接点や地域への問題意識が欠如したままでは、役に立ちません。もっと言うなら、問題です。大学の研究は、地域との関わりを持たせる、しかもそれを自分で見つけてくる、こういうシステムに転換することを切に望みます。



まちづくりプランナー
石川 貴 洋

起業支援の現場を 見てわかったこと

はじめに

先日、東京のSOHO（スモールオフィス・ホームオフィス）起業支援施設4ヶ所を訪ね、関係者からお話を聞く機会を得ました。起業支援の現場を見てわかったこと、感じたことを述べてみたいと思います。

世田谷ものづくり学校（東京都世田谷区）

ここは、民間のデザイン会社が廃校になった区立中学校を世田谷区から借り受けて、2004年7月から起業支援事業を行っています。

渋谷まで自転車で行ける近さながら、最寄駅から徒歩10分の住宅地という立地は、決してビジネスに便利な環境ではありません。校舎だった建物は、給排水が詰まったり、電気容量の不足、空調の不備など、オフィスとしては不都合も多いそうです。ところが、長い廊下や日溜りができる階段、木製のドアや棚、机・椅子などが醸す、学校特有の懐かしさ、温かみが、むしろ若いクリエイター達を惹きつけています。

入居者は運営するデザイン会社が募集、決定していて、デザイン、アート、映像、建築、パン屋（！）等々、“ものづくり”にかかわる幅広い業種にわたっています。選考基準は「気持ちのいいヤツ、ノリのいいヤツ」。つまり、仲間と上手に楽しくやっていける人であること。というのは、ここでは起業家同士の交流の中で、仕事上の問題解決やビジネス・マッチングが行われることが、起業支援の重要なポイントだと位置付けられているからです。また、すでに第一線で活躍する有名クリエイターも入居させて、起業家も無い入居者に刺激やビジネスチャンスを与えるとともに、「ものづくり学校」自体の評価を高めるといった、戦略的な入居者のミックスも行っています。

神田REN Project（東京都千代田区）

ここは純民間の起業支援施設で、2003年10月に開設されました。神田駅に近い中小オフィスビル、雑居ビルが集まる一角に位置し、繊維問屋街や秋葉原電気街などが近く、商店や印刷等の町工場、作業所なども目立ちます。こうした地域の産業資源を活用して新たなビジネスを起こせる創造的な人材を地域に呼び込んで、神田界隈のビジネス的価値を高め、停滞する地場産業の振興やオフィスの空室解消につなげようというまちづくりの一環として、起業支援が位置付けられています。そのため周辺の空室等も会場にしたアートイベントを開催するなどして、地域社会との関係づ